

目次

一般ニュース 2

総長の海外出張、評議会（10月21日(火)）
承認事項・報告事項、「東京大学稷門賞」
授賞式を挙行、2003年度東京大学・UBC
学生交流事業が行われる

部局ニュース 4

平成16(2004)年度大学院法学政治学研究科
修士課程入学試験について、東京直下型地
震を想定した防災訓練・講演会を実施、農
場開場125周年記念シンポジウム・祝賀会
開催される、医科学研究所で慰霊祭行われ
る、柏キャンパス一般公開開催される、物
性研究所一般講演会開催される、海洋研究
所「大槌センター30周年」記念講演会及び
祝賀会開催される、第77回国立7大学附属
図書館協議会開催される、「シーボルトの
21世紀」展関連講演会の開催について、平

成15年度総合研究博物館公開講座「シーボ
ルトの21世紀」開催される

掲示板

99回オルガ

ン演奏会の開催、新領域創成科学研究科に
トランスレーショナル研究の拠点誕生、前
近代日本の史料遺産プロジェクト 第4回
公開研究集会、平成15年度第4回バイオシ
ーズ・マッチング会/第19回分生研バイオ
テクノロジー懇談会、教育用計算機システ
ムの更新について

広報委員会（東京大学の法人化に関するQ&A）... 13
事務連絡（人事異動（教官、事務官））... 14
訃報（芦原義信名誉教授、菊地正幸教授）... 15
淡青評論「“淡青”から考えたこと」..... 16

総長の海外出張

平成15年11月12日(水)～平成15年11月14日(金)
国立台湾大学創立75周年記念式典出席のため、台湾へ出張する。

評議会(10月21日(火))承認事項

東京大学学部通則の一部改正

平成15年9月19日付けの学校教育法施行規則(昭和22年文部省令第11号)の一部改正に伴い、「大学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、18歳に達したものに入学資格を認めることができることになったこと等に伴い、所要の改正が行われた。

附 則

この規則は、平成15年10月21日から施行し、改正後の東京大学学部通則の規定は、平成15年9月19日から適用する。

東京大学21世紀COEプログラム推進室規則及び東京大学21世紀COEプログラム推進室運営委員会規則の制定

東京大学における21世紀COEプログラムに関し、より一層の研究拠点事業を促し、東京大学全体の事業の活性化を図るため、「東京大学21世紀COEプログラム推進室規則」及び「東京大学21世紀COEプログラム推進室運営委員会規則」が制定された。

東京大学21世紀COEプログラム推進室規則

(設置)

第1条 総長室の下に、21世紀COEプログラム推進室(以下「推進室」という。)を設置する。

(目的)

第2条 推進室は、東京大学における21世紀COEプログラム(以下「プログラム」という。)に関し、より一層の研究拠点事業を促し、東京大学全体の事業の活性化を図るため、次の各号に掲げる業務を行うことを目的とする。

- (1) プログラム全体の総合的推進
- (2) プログラムの進捗状況の把握
- (3) プログラムの広報
- (4) プログラムの運営、評価等業務の支援
- (5) その他プログラムに関し必要と認める事項

(室長)

第3条 推進室に室長を置く。

2 室長は、総長が指名する副学長をもって充てる。

3 室長は、推進室の業務を総括する。

(室員)

第4条 推進室に、室員若干名を置く。

室員は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) 東京大学の教職員のうちから、室長の指名に基づき、総長が委嘱した者
- (2) その他第2条に規定する業務を行うため、室長が特に必要と認められた者

(運営委員会)

第5条 推進室に、推進室の管理運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営に関しては、別に定める。

(事務)

第6条 推進室の事務は、研究協力部研究協力課において処理する。

(補則)

第7条 この規則に定めぬものとする。

渡辺副学長の挨拶の後、受賞関係者と本学関係者と和やかな雰囲気の中、懇談が行われた。
当該顕彰については、年2回行うこととしている。

受賞者一覧

1 三木米子 殿

授賞理由：ご子息（農学生命科学研究科修士課程修了その後受託研究員）の不慮の事故死後に寄附。それを「三木正司奨学基金」として農学部学生へ奨学金を支給（給与）。

医科学研究所で慰霊祭行われる

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月9日（木）13時30分から医科学研究所慰霊祭を挙行了。式は、参列者全員による黙禱に始まり、献体者御尊名の奉読の後、山本所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所教職員が献花を行い、最後に、岩本病院長から御遺族に対して感謝のことばがあり、14時過ぎに滞りなく終了した。



「御霊に捧げることば」を述べる山本所長



遺族に感謝の挨拶を述べる岩本病院長

（医科学研究所）

柏キャンパス一般公開開催される

10月31日（金）11月1日（土）の両日にわたり柏キャンパス（宇宙線研究所、物性研究所、新領域創成科学研究科基盤科学研究系・先端生命研究系、環境安全研究センター柏支所）において、一般公開が開催された。

この一般公開は、「地域・社会との連携・交流」や「知的啓発」を目指して、宇宙線研究所、物性研究所が柏キャンパスへ移転した当初から実施されてきたもので、今年で4回目となる。

公開内容は、各部局とも、日頃の研究成果の紹介、実験体験コーナー、特別企画及び講演会等それぞれ特色ある催しが行われた。



実験体験を楽しむ中学生

特に、物性研究所と新領域創成科学研究科基盤科学研究系で行われた「ガイドツアー」（スタッフによる見どころ案内）は、毎回、多数の参加者があり好評であった。

両日とも、家族連れが目立ったが、特に、1日目は、学校行事として高校生約80名が貸切バスで訪れ、2日目は理科教育の一環として訪れた中学生約200名等、千葉県内のみならず、近県からも中・高校生が多数訪れ、熱心にメモを取るなど、さながら課外授業のような雰囲気であった。



団体で訪れた中学生たち

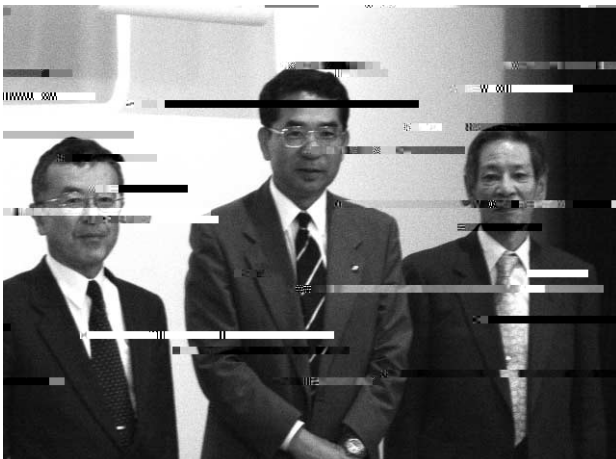
今年の一般公開は、まずまずの天気恵まれたこともあり、2日間を通して、4,000名を超える方々が訪れ、中でも自転車での来場者が多く見られたことは、地域に開かれたキャンパスとしての雰囲気が感じられた。

来場者は、大学院生による先端研究の丁寧な説明や、展示、実験体験等を通じ、より東大柏キャンパスに親しみを持って帰られた。

（柏地区事務部）

物性研究所一般講演会開催される

物性研究所では去る10月11日(土)13時から、千葉県柏市・柏市教育委員会との共催でアミュゼ柏において、木下實東京大学名誉教授(2003年日本学士院賞受賞)、福山秀敏東北大学金属材料研究所教授(前物性研究所長、2003年紫綬褒章受章)の両氏による「一般講演会」を開催した。講演会では、最近の研究成果を踏まえて、物質科学の法則性や有機化合物で磁石をつくることなど、具体的な事例を交えて話され、講演後、聴講者との活発な質疑応答などが行われた。当日は、3連休の初日にもかかわらず、物質科学の最前線についての講演ということもあり、約120名が聴講する講演会となった。



左から福山東北大学教授(前物性研究所長)、本多柏市長、木下名誉教授
(物性研究所)

海洋研究所「大槌センター30周年」記念講演会及び祝賀会開催される

海洋研究所では、附属大槌臨海研究センター創立30周年・附属国際沿岸海洋研究センターの創立を記念して10月24日(金)岩手県上閉伊郡大槌町の大槌町城山公園体育館及び同中央公民館において記念講演会及び祝賀会を行った。

記念講演では、大学院理学系研究科附属臨海実験所長の森澤正昭教授、元大槌臨海研究センター長の沼知健一教授よりそれぞれ「大槌でのシロザケとホヤを使った精子運動機構の研究」「大槌臨海研究センター設立の経緯と基礎的の海洋研究の意義」と題して行われ、会場には地元の大槌高校の生徒をはじめ200名ほどが興味深く聞き入っていた。

祝賀会では、地元関係者、大学関係者、センターOB職員、海洋研究所職員、研究船関係者ら約100名が参加し、小池海洋研究所長の挨拶に始まり、高橋岩手県副知事、山崎大槌町長、藤原文部科学省研究振興局学術機関課長(藤澤附置研究所係長代読)より祝辞があった。



記念講演を行う元大槌臨海研究センター長の沼知教授



祝賀会で挨拶する小池所長

引き続き、小池所長から、センターの発展に多大な尽力をいただいた大槌町、岩手県水産技術センター、釜石海上保安部、大槌町漁業協同組合、釜石東部漁業協同組合に対して感謝状の贈呈の後、猪内岩手大学副学長の発声により乾杯を行った。歓談後児玉北里大学水産学部長、不破国際連合大学学術顧問、平 日本学術振興会監事から祝辞が述べられた。

なお、当日はセンター及び大槌港に寄港した研究船淡青丸の一般公開も行われ、平日にもかかわらず小中学生等多くの見学者で賑わった。

(海洋研究所)

第77回国立7大学附属図書館協議会開催される

去る10月3日(金)に、附属図書館において、国立7大学図書館協議会が開催された。これは、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の附属図書館の館長、部課長が一同に会して、7大学が共通して当面する図書館運営、サービスに関する諸問題について話し合うもので、今年で77回目を迎えた。

当日は、13時から14時半まで、附属図書館長会議と部

1274 2003. 11. 12

課長会議が並行して行われた後、

平成15年度総合研究博物館公開講座「シーボルトの21世紀」開催される

総合研究博物館では10月27日(月)から10月31日(金)まで(毎回17:30~19:30、全5回)、下記のとおり特別展「シーボルトの21世紀」展に連動した公開講座が開催されました。

- 第1回 「シーボルトの使命と事跡」
大場秀章(総合研究博物館教授)
- 第2回 「鉱物のシーボルディアナ」
田賀井篤平(総合研究博物館教授)
- 第3回 「シーボルトと日本の文化」
大場秀章(総合研究博物館教授)
- 第4回 「植物のシーボルディアナ」
加藤信重(獨協大学教授)
- 第5回 「21世紀の学術探検とその意義：シーボルトに学ぶ」
大場秀章(総合研究博物館教授)

講座参加者からは、「シーボルトや彼を囲む人々の残した標本を通して、シーボルトの活動や人物像を確認することができた」、「シーボルトに興味があったが、なかなか独学で学ぶことができなかつたのでとても良い機会になった」等の感想がありました。また、講師の解説を聞きながらの展示見学は参加者に「とてもわかりやすかつた」と好評を得ました。

《展示情報》

特別展示「シーボルトの21世紀」展
会 期：10月4日(土)~12月7日(日)
場 所：総合研究博物館 1階展示ルーム
開館時間：10:00~17:00(入館は16:30まで)
休 館 日：毎週月曜日(月曜日が祝日にあたる場合は開館、翌日火曜日が休館)
入 館 料：無料
問い合わせ先：03-5777-8600(ハローダイヤル)
ホームページ：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>



講義を行う大場教授

(総合研究博物館)

東京大学/ILOノーベル平和賞社会政策シンポジウム「グローバル化と仕事の未来」

ILOのノーベル平和賞受賞基金により1993年以来世界の主要大学で行われてきている社会政策シンポジウムを、本年12月1~3日に東京大学とILO(国際労働機関)の共催で下記のとおり開催します。ロナルド・ドーア教授(ロンドン大学)を基調報告者に、各国の代表的社会科学研究者をパネリストに迎え、「グローバル化と仕事の未来」をテーマに4つのセッションとラウンド・テーブルを行います。学生、大学院生、教員をはじめ本学関係者の皆さんの参加を歓迎します。

科学研究者をパネリストに迎え、「 流立疾包犧 々々 岑

日 時 11月27日(木)18時30分開演

場 所 教養学部900番教室

曲 目 J・クラーク

デンマーク王子のマーチ

W・バード

女王のアルマン、ファンシー

J・スタンリー

ヴォランタリー

M・ケミジ

オルガン協奏曲第2番

S・ウェスリー

ホルズワーシー教会の鐘

H・ハウウェルズ

オルガンのための6つの小品より

A・ホリングス

トランペット・メヌエット

日時：11月25日（火） 13時30分～17時00分頃
会場：弥生講堂・一条ホール
テーマ：バイオテクノロジーの最先端

プログラム

- 13:30 開会挨拶
- 13:40 豊島 近： 膜蛋白質構造研究の最先端
- 13:55 橋本祐一： レチノイドとサリドマイドをリードにした創薬研究
- 14:10 宮島 篤： 幹細胞研究の医療への応用
- 14:25 加藤茂明： 細胞核内の情報伝達による遺伝子発現制御機構
- 14:40 秋山 徹： 癌化のシグナル伝達と分子標的治療
- 14:55 鶴尾 隆： 分子標的薬剤のトランスレーショナルリサーチ
- 15:10： 産学連携についての取り組み、窓口紹介について
- 15:20： ポスターセッション及び交流会～
（於：弥生講堂会議室）
ラボ見学（コース別・3分野）
- 17:00： 終了予定

問い合わせ先：分子細胞生物学研究所 庶務掛
電話 03-5841-7812

（分子細胞生物学研究所）

教育用計算機システムの更新について

情報基盤センターでは、教育用計算機システムを平成15年3月に更新する。更新後のシステムでは、情報処理教育およびプログラミング教育用にiMac（Mac OS X）、WindowsかLinuxを使う講義用にディスクレスWindows/Linux機（MintWaveVID）が端末となる。どちらの端末もネットワークからブートして起動し、端末のUSBやCD-RW/DVD-ROM（一部）が利用できる。

ファイルサーバは容量を拡大するとともに、WebDAVプロトコルによりECCS外のPCからの利用が

（IDS）を導入する。また、1000セッションが可能なストリーミングサーバも導入する。

ソフトウェアでは、プログラミング言語環境（GCC、Java言語環境）、SAS、Mathematica、AutoCAD 2004、3ds max 6、MS-Office、Photoshop Elements、Adobe Acrobat、UNIX系フリーソフトウェアを導入する。なお、SAS（Window版）とMathematicaについてはサイトライセンスを取得予定であり、全学へのライセンス配布（負担金あり）を予定している。

本件の詳細は<http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/>で広報しているが、問い合わせは ecc-support@ecc.u-tokyo.ac.jp（内線23004）で受け付けている。

この教育計算機環境の整備にともない、講義での映像教材やウェブ教材などの利用環境が調うが、教材の作成支援については ellearn-support@itc.u-tokyo.ac.jp（内線23002）で受け付けている。

（情報基盤センター）

敦 叔 淵 齋 N 楡 悦 橋 8 = 領 哀 宛 逢 合 宛 壺 哀 宛 逢 邊

≪ 訃報 ≫

芦原 義信 名誉教授

本学名誉教授芦原義信先生は9月24日(水)午前6時12分に逝去されました。享年85歳でした。

芦原先生は東京四谷でお生まれになり、本学建築学科を昭和17年に卒業されました。終戦後の昭和27年には、ハーバード大学建築学部へ留学され、さらにロックフェラー財団の奨学金を得て世界の都市を巡られました。

芦原先生は、芸術的にも科学的にも、建築を単体としてではなく、建築を周辺の環境と一体的に扱われました。この考え方は、帰国後最初に設計され日本建築学会賞作品賞を受賞された中央公論ビル(1956)に表れ、続くソニービル(1966)、駒沢公園体育館・管制塔(1964)、モントリオール万国博・日本館(1967)、本郷構内の東京大学御殿下記念館(1976)、第一勧銀本店(1981)、国立歴史民族博物館(1983)などの代表作全てで展開されています。また、このような考え方を、理論的に、かつ分かりやすくまとめられたのが『街萌 子胞 隣ひ翁

“淡青”から考えた事

原稿執筆をお引き受けして、最初に考えたのは“淡青”の由来でした。いろいろと考えていたのですが、最近になり、この由来が広報誌「淡青」の表紙裏に書かれてあるのに気が付きました（私は、今年の4月に他大学から移って来ました）。その説明を読むと格別な意味が無いように思われますが、ここでは、この言葉から連想された事について書いてみたいと思います。

淡い色というのは、私が考える日本文化を象徴しています。淡い色の中に微妙な変化を見いだす繊細さ、また、白・黒をはっきりさせない、曖昧さ、あるいは、一種のやさしさなどが連想されます。しかし、最近の周囲を見まわすと、いたる所に原色がはびこっているように思えます。これは、計算機等の発達によるデジタル化や、昔の風土の消滅（減少）に関係しているように思われます。例えば、デジタル化により作られたアニメには淡さはほとんど無く、くっきりした線や原色があふれています（宮崎アニメ

は別ですが）。このような社会環境で育った若い人たち、あるいは我々さえもが（考えも風貌も）原色志向になるのは、当然かもしれません。

文化や価値観が時代により変化するのは、やむ負えない事だと思います。この事は、どのような文化や価値観も絶対に良い／悪いと言えないという事だと思えます。このような状況で各世代が果たす役割は何でしょうか？私の考えでは、他の世代（特に次世代）に迎合するのではなく、自分たちの世代の文化／価値観を主張し続ける事ではないかと思えます（ただし、力で押し付けない）。主張する事は賛成する／反対するとか、従う／従わないと
文 化 や
は、他の世代（特に次世代）に〔通